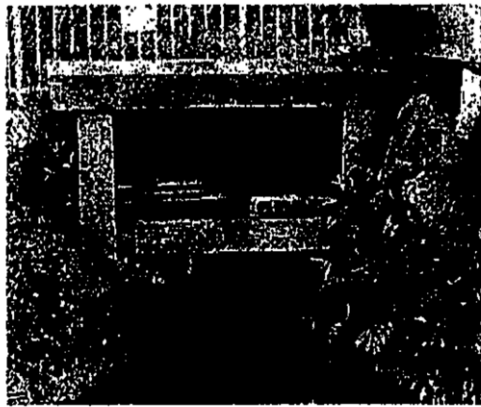


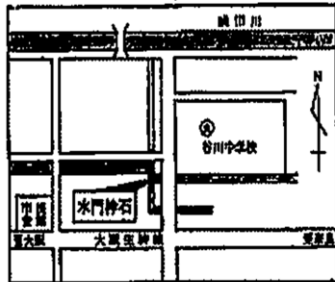
時の流れの生き証人



水門 樺石 曙町

谷川中学校の南側と西側を流れる水路が合流するところにある水門の跡。門の形跡を残す数少ないもの一つである。

市内平野部一帯は深野池・旧大和川流域の低湿地であり、大和川付け替え後の新田開発の時には、かんがい用水を流す川として数多くの井路が掘られた。大水や干害との戦いは、低湿地農業の宿命であった。



人々は井路に水門を作った。大雨の時は全水門を閉じ、その場所には大型の水車を掘え付け、農民総出で排水に努めた。また日常でもたえず水の世に注意を払って干害に備えていた。安政六（一八五九）年に作られたこの水門も、中学生をはじめ多くの人が通る場所でありながら、現在ではその役目を終え、ひっそりと当時の農民の苦勞をしのばせている。

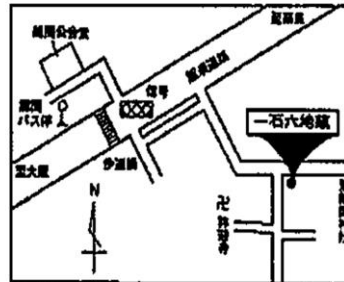
時の流れの生き証人



一石六地蔵 龍間

この六地蔵は幅八十六尺、高さ百四十八尺の舟型の石に平均身の丈四十六尺の六体の地蔵尊が半肉彫されている。別々の石に彫られた六つの地蔵が並んでいるのはよく見かけられるが、一つの石

に六体彫られているのは珍しく、北河内では二基しかみられない。六地蔵は、一切の生物が行いの善し悪しによってわかれ住んでいる六道という六つの世界のどこにいても救いの手を差し伸べてくれ



るといわれた。毎月の八、十四、十五、二十三、二十九、三十日は六斎日と呼ばれ、この日には悪鬼が勢いを得て悪いことが起こるので、人々は戒めを守り良い行いをする必要があったという。石仏に刻まれた文字から一五六七（永禄十）年二月二十三日の六斎日に、信者たちによって、自分たちと先祖の供養のため建立されたと考えられる。